

涅槃会にちなんで

定光寺 乙川文英

平成二十七年三月二十四日 加茂法話会

一、当に一心に出道を勤求すべし。

汝等比丘、悲悩を懐くこと勿れ、若し我世に住すること一劫するとも、会うものは亦た当に滅すべし。会うて而も離れざることを終に得べからず。・・・応に度すべき者は、若しは天上人間皆悉く已に度す。其の未だ度せざる者には、皆亦た已に得度の因縁を作す。自今已後、我が諸の弟子、展転して之を行ぜば、即ち是れ如来の法身常に在して而も滅せざるなり。

汝等比丘、常に当に一心に出道を勤求すべし。・・・時將に過ぎなると欲す、我れ滅度せんと欲す。是れ我が最後の教誨する所なり。『仏遺教経』

二、阿難は多聞を好む。

抑も阿難は乃往過去の昔、空王の所にして、今の釈迦仏と同時に阿耨多羅三藐三菩提心を発しき。阿難は多聞を好む。故に未だ正覚を成ぜず。釈迦仏は精進を修しき。之に依て等正覚を成じたまふ。実に知る、多聞は道の障礙たること、是れ其証拠なり。故に華嚴經に曰く、譬へば貧窮の人の他の宝を算へて自ら半銭の分なきが如し。多聞も亦復た是の如しと。親切に此道に訣著せんと思はば、多聞を好むこと勿れ。直に勇猛精進すべし。〔『伝光録』第二章〕